



第 24 号

中田 祥子
KCCN 理事
消費生活専門相談員

1980年代だったと思います。ブドウの農薬使用に抗議して不買運動が起きていることをアメリカのニュースで知りました。食品の安全を心配してのことだとまず思ったのですが、農園で働く労働者の健康被害を慮っての事と知って、商品を、購入する対象としての狭い見方しかしていなかったことに気づきました。

1990年代だったと思います。アメリカの靴メーカーのアジアでの委託工場が児童を安い賃金で働かせていることが社会的に批判され不買運動の呼びかけがありました。商品の価格はどうやって決まるのか、商品はどのように作られているのか考えるようになりました。

それから、新聞の小さな記事にビッグイシューという雑誌の日本版が創刊されたことが載っていました。ホームレスの人が販売人になって、雑誌の代金からその一部を収入として直接得ることが出来る仕組みでした。商品の対価が行き着くところを知って、商品に対する満足度に加えて購入するという行為がもたらす助けあう意義ということを考えるようになりました。

また、その雑誌に掲載されていたフェアトレードショップの広告から無料カタログプレゼントをもらいました。アフリカやアジアの国々の女性が手仕事で作上げる服や雑貨、自立のために協力しあって働く人たちが作った品物を手に取ってみると、作り手と買い手、商品を通じてお互いを感じます。商品の価格をどうやって決めるのか、労働の対価として生活できる収入になっているのか。その視点を持って商品を見ることを心掛けたいと思うようになりました。

安い賃金、過酷な労働は外国だけの話ではなく、今、国内でもブラック企業、ブラックバイトという言葉が聞きます。長時間労働による病気や過労死、賃金未払いなど、商品やサービスの向こう側で起きていることに目を向けようと思います。商品やサービスを選択する時にしっかり考えようと思います。

国際消費者機構が提唱している消費者の「8つの権利」と「5つの責任」の中の「社会的弱者への配慮責任」を、私は今最も大切な責任として自覚をもって行動したいと思っています。

(2015年12月)